

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299-5367

郵便振替 〇〇―〇〇―九―五八四三― 労金 中央労金本店 No.1154163

くもくじ

■巻頭言■

現代日本の思想と背景

滝野 忠：2

我が町新得町と「なつぞら」

佐野 周二：4

―NHK連続テレビ小説裏話―

千葉さんと田原さんの勘違い

原野人：7

―搾取と被搾取の中に生きていることを忘れてはいけない―

読者からのおたより

.....12

旬刊 社会通信

NO.1289

二〇一九年六月一日号

二〇一九年六月一日発行
(毎月一日・十五日二回発行)

現代日本の思想と背景

自民党政治への不平・不満・苦情・異存、そしていらだちは膨れ上がる。自民の支持率は落ちない、先の統一自治体選挙で議席をふやした。自民は政党政治の要である機関紙をもたず、党員―議員後援会、大企業的大量入党―はわずか百万にすぎないのだ。共産を除く野党の非力はだれもが主張する。階級関係そして生産力と生産諸関係の矛盾の総和から、考え、分析しその原因、真因が求められなければならない。客観的かつ主体的な二つの面から考える。

客観的要因

まず客観的要因である。

現代社会の基本矛盾である生産力と生産関係の矛盾は、「豊かな中の貧困」―格差拡大、社会不安の増大―としてある。

技術の進歩ははやい。「革命」的ですからある。きのうの技術は今日、明日捨てられる。技術の変化―生産手段の体系の変化―は労働、生活の姿を変える。現場労働者が学び、訓練した技術はすぐに古くなる。熟練労働は単純労働にとりかえられ、産業予備軍がふえる。労働者の競争は激しくなる。抵抗が弱くなれば生活水準は下がる。

将来への不安―子育て、教育、健康、老後―が国民に重くのしかかる。

労働者には失業への漫然とした、しかし、はつきりとした将来不安がある。技術の進歩は生産力の向上としてあらわれる、一人の労働者がヨリ多くの生産物を生む。労働は軽減され、労働時間は短くてすむ条件をつくる。しかし、資本主義社会での生産性向上―技術の進歩―は、資本の「貨殖」、剰余価値の拡大を目的とする。

資本の儲け、利潤(剰余価値)は不払い労働がこれをつくる。だから、資本主義社会は搾取の強化となる。「窮乏」「抑圧」「隷従」「墮落」「搾取の度の増大」として現われる。全般的な「不安の増大」の根っ子である。

「窮乏」は飯が食えなくなることだけではない。つねに失業の不安にさらされ、いづ飯が食えなくなるかわからない。失業するということは飯が食えなくなることである。不安は精神を萎縮させ、行動性、積極性を奪う。長時間労働と労働の強度、搾取の度の増大は、労働者の資本の抑圧の強化、隷従としてあらわれる。資本はこうして「自死」「精神的病氣」、墮落となって労働者を襲う。

不安は連動し発展する。資本は不安を増幅すべく知恵を絞る。少子・高齢化だ、社会保障は維持できない、自然災害が増えていると。子どもたちは毎日、おびえながら通学し、高齢者たちはいつまで生きる、資金はどうなる、新しい犯罪オレオレ詐欺等におびえる。

思想攻撃

その一方、支配階級は、不安がラッパとなって社会を揺り動かすことがないよう、「解消」策に躍起となる。「脅威」の宣伝・扇動である。北朝鮮、中国が「敵」とされ、脅威論が叫ばれる。「脅威」論は意識を内に向け民族主義―排外主義―を強め、社会的問題への意識を萎縮させ、能動性、活動性を封じる。

青年労働者は「車が好きだ、買いたい、が買えない、なぜか」と問い、「買う、走る、停める、給油、整備、安全に税がかかる、若者には維持できません」という。支配階級は彼らに株式投資(NISA)や投資を扇動する。金利はゼロである。小さな「財産」家は社員持ち株制度ともあいまって、労働者意識でなく小市民意識の虜(とりにこ)とされる。資本主義とたたかう者を保守とみなし、「金儲け」の諸政策を革新とする思想傾向をつくる。

パンとサーカスである。ローマの名言に「民衆が熱心に求めるのは今や二つだけ、パンとサーカス」がある。パンとサーカスとは「食べ物と娯楽(見世物)」である。哲学者セネカ(前4年頃〜後65年)は「ローマは全世界からあらゆる珍味を集めたが、彼らの胃はそれを受け容れることができず『食べるために吐き、吐くために食べている』」と記している。日本では代替わりから、ラグビー、オリンピッククへとおまつりが延々と続けられる。その間に安倍は憲法改悪を企む。矛盾を先延ばしする、目先を変える、考えさせない世論誘導となる。

国家・権力者たちはマスメディアを買収する。メディアの収入源は企業、とりわけ独占企業の広告料が占める。TVはすべてである。国家とマスメディアは国の施策実践にプチブル・インテリ(学者・文化人・タレント、評論家・ジャーナリスト等)をこれまた買収する。小使いを与え、彼らのしつぽとする。これらすべては矛盾をかくすため、の思想宣伝である。労働者階級は敵の思想宣伝に負けている。

政策パクリ

自民は野党の政策をパクリ。共産を除く主要野党は現代社会にあつて主要矛盾と副次矛盾を考えない。副次矛盾が主要矛盾から来ることを考えようとしない。副次矛盾が主要矛盾であるかのように考える。プチブル・インテリは視野がせまい。本質と現象をいっしょくたに考える。己の専門分野が主要なものと考ええる。だから、彼らの「構想」は無政府主義的かつ空想的となる。BIなる珍理論もその一つである。

権力者は主要な矛盾と副次矛盾の区別を知っている。資本主義の根本にかかわること以外なら副次矛盾をパクリ、自分の政策とし、庶民をたぶらかすことなど屁とも思わない。保育所・幼稚園、奨学金問題等々全てがそうである。

主要矛盾は権力機関(裁判所、警察、官僚等)を使って徹底的に弾圧する。沖縄そして原子力、軍備増強、社会保障切り捨て、たたかう労働組合への弾圧、増税問題がそうである。

思想状況

自民のこうした方策が効を奏している背景が二つある。第二次大戦後の70年、戦争の「ない」時代が続いた。憲法の「理念」を守る力が、変えたいとする力を上回っていたからだ。そこから、「これからも戦争はない」との意識が生まれる。日本近現代史は第2次大戦まで戦争の連続であった。「平和ボケ」である。

もう一つは天皇を「平和のシンボル」に利用し、安倍自民党の戦争政策への「中和剤」とする。天皇そして天皇制が「玉」とされ、権力の道具とされる。この思想攻勢にとりこまれているのは、「リベラル」といわれる知識人層に多い。その層の思想が国民に伝染する。

(滝野 忠)

我が町新得町と「なつぞら」

— NHK連続テレビ小説裏話 —

NHK連続テレビ小説「なつぞら」(朝ドラ100作目)が4月1日から始まり人気を集めている。ロケ地の北海道新得町で生まれ育った私が感じた裏話など思いっくままに伝えたい。(情報は昨年からのNHKテレビ、北海道新聞、十勝毎日新聞などによる)

概要

太平洋戦争直後に戦災孤児として北海道・十勝の酪農家に引き取られたヒロイン奥原なつ(主演・広瀬すず)が、十勝で育んだ豊かな想像力と開拓者精神を生かし、草創期のアニメ業界で活躍する姿を描く物語。放送は9月28日までの全156回。

▽あらすじ(北海道新聞2019年3月31日より) 太平洋戦争で両親を亡くした9歳の奥原なつ(広瀬すず、幼少期は栗野咲莉)が1946年夏、十勝の柴田牧場に来てきた。父親の戦友で、牧場を経営する柴田剛男(藤木直人)に引き取られたのだった。

剛男と妻・富士子(松嶋菜々子)、富士子の父・泰樹(草刈正雄)たちに愛され、なつは育つ。高校生になり、馬を描く山田天陽(吉沢亮)に触発され、絵を描く仕事に興味を持つ。生き別れた兄(岡田将生)を探そうと東京へ行く。

大森寿美男作。語りは内村光良。十勝編では高畑淳子、演劇ユニットTEAM NACS(チームナックス)の音野琢磨、安田顕、戸次重幸らが出演する。東京・新宿編には山口智子、比嘉愛末らが加わる。主題歌はスピッツの「優しいあの子」。

▽コメント 私は1947年生まれなので『なつぞら』物語の時代背景が分かる。宮城県出身の私の両親も生きるため北海道にやってきた。美唄炭鉱で働いていたが、落盤など体験して十勝の新得町にやってきた。「なつ」のような戦災孤児の多くが東京・上野駅構内に溢れ、本州から北海道に多くの方々が開拓者精神をもって仕事を求めてやってきた。

新得町(北海道十勝)

ロケ地について制作統括の磯智明プロデューサーは「四方を山で囲まれ、晴れた日には青空と日高山脈をバックに撮れる。遮る現代の建造物も全くない」と新得町となり、日本一寒い陸別町では保存状態が良好で、当時の面影を残した木造の牛舎などを撮影し、放送では建物の外観と新得町の風景を組み合わせる。

十勝ロケは新得町と陸別町を軸に昨年6月と今年1月に行われ、放送開始後の4月26日にも新得町内の牧草地での撮影が公開された。その他のロケ協力自治体として十勝管内の帯広市、清水町、中札内村、池田町、そして茨城県大子町、千葉県原市がテレビで紹介されている。

昨年6月、新得町で20歳を迎えた広瀬すずさんに、十勝の牧場をイメージして作られた特製の誕生ケーキがロケ地の牧草地で贈られている。

▽私はこの風景の牧草地で今年も枝拾い・石拾いの仕事をしている。(ロケ地現場の正式発表は7月以降とか?)

人物

ヒロインなつの幼少役を演じる栗野咲莉さんは、札幌で開かれたトークショーで「おばあちゃんが北海道出身で、ひいひいおじいちゃんが、むかし十勝の豊頃村の村長さんだった」と話した。「高祖父は、旧豊頃村(十勝の現豊頃町)村長の故佐藤義助氏」草刈正雄さん演じる柴田泰樹は、晩成社を訪れて牛飼いを勧められたと説明。「バターチャーシュー」と呼ばれる樽状の道具を使い、ヒロイン奥原なつらが牛乳からバターを作りジャガイモと一緒に味わったストーリーは事実に基づいている。

▽泰樹は、十勝の大樹町のイメージからでは? 十勝に入植し、荒れ地を切り開いた柴田泰樹と依田勉三の姿が重なる。*十勝開拓の依田勉三や北海道150年に関わる松浦武四郎について、次回に寄す。

十勝農業高校

劇中の十勝農業高校は、帯広農業高校のかつての学校名だ。北海道庁立十勝農業学校(T11)として発足し、道立十勝農業高等学校(S23)、北海道川西農業高等学校(S25)、そして北海道帯広農業高等学校(S32)となった。

十勝農業高校で演劇を始めたなつが熱唱した「FFJの歌」は、全国の農業高校で70年近く歌い継がれている。

▽FFJは「日本学校農業クラブ連盟(Future Farmers of Japan)」の略称。すべての農業高校生徒が参加する農業クラブの全国組織として、1950年に結成した。農業クラブは自主的・主体的な活動を通し、「科学性」「社会性」「指導性」を高めるのが目標。全国大会も開き、意見・研究発表や農業鑑定競技などで交流している。

3番まである歌詞に理想や精神が込められたFFJの歌は1951年に誕生。全国の農業高生徒が歌え、卒業後も口ずさめるほど浸透しているという。そんな縁がある帯広高では年4回、農業クラブ授業の始業時などにFFJの歌を歌っている。

演劇部顧問の倉田教諭(柄本佑さん)が作った台本が「白蛇伝説」。鹿追町の然別湖にまつわる伝説で、劇では白蛇を助ける場面から(アイヌ民族の)村長の娘「ペチカ」と神の使いをなつが演じる。凶作による飢饉(ききん)を女神とその使いの白蛇が救ったという物語でオシロコマ(川魚)も出てくる。*「日本国は単一民族」と言った有名な首相もいたが、北海道の先住民族はアイヌ人である。

広瀬すずさんはドサンコ(馬)に乗るシーンの撮影のため、事前に根室管内中標津町の牧場で訓練したり、スキーで歩くシーンの撮影のために横浜で特訓している。

神田日勝記念美術館

4月26日放送の吉沢亮さん演じる山田天陽がベニヤ板に馬などの絵を描く場面は、十勝の鹿追町ゆかりの画家神田日勝(1937~70)を連想させている。今回の物

語を貫くテーマ「開拓者精神」も日勝の生涯から構想を得たという。昨年5月に吉沢さんが役づくりのため鹿追町の神田日勝記念美術館を訪れている。

▽日勝は1937年に東京で生まれ、戦時疎開団に加わった家族と共に鹿追町に入植。開拓営農の傍ら、油彩画制作に励んだ。ベニヤ板をキャンパスに、ペインティングナイフを用いながら力強いタッチで描き、農耕馬や牛など生活に根差したモチーフを克明に表現した。独自のリアリズム画法を切り開いた。

狩勝トンネル

▽『なつぞら』は、「東京から、なつを探しに生き別れた幼なじみの信哉（工藤阿須加さん）が訪ね、なつと富士子は、兄の咲太郎を探しに十勝から2日かけて、東京の新宿にやってきた」とさらっと説明するが、当時の長旅のシーンがほしいところだ。東京と北海道十勝までの2日間を想像してほしい。青森と函館間の船旅、蒸気機関車（SL）にけん引される客車の旅は大変だ。

十勝の玄関口（帯広、釧路、根室方面）・新得町には、（新日本八景の）狩勝峠越えのトンネル（車窓からの世界四大展望）があった。1948年5月この狩勝トンネルを舞台にした日本労働運動史に残る「狩勝トンネル争議」がある。

1000分の25の急こう配の路線を機関車乗務員は、排煙と熱気によって窒息・やけどにあい過酷な労働の改善を求め、国労旭川支部名で減車闘争の実力行使に入った。労使交渉は長期化の様相を示し、国労新得分会の柚原秀雄闘争委員長（新得機関区助役）は、上り列車に飛び込み自殺する。

7月31日には政令201号が施行（スト権奪還闘争の原点：佐野）され公務員の争議行為が禁止される。このため乗務員60余名は「柚原青年行動隊」を組織し、8月6日に一斉に職場を離脱して全国にこの実情を訴えたが、職場復帰をしなかった49名が政令違反に問われて免職処分となった。（新得町史より）

「なつぞら」放送はアニメ編などに入っていくが、今後も裏話や歴史を学びながら観ていきたい。

余禄 放送開始前に、JR札幌駅や東京メトロ丸の内線新宿駅の地下空間にドラマをPRする大型広告が登場し、ムードを盛り上げている。

大阪の百貨店阪急うめだ本店で開催した十勝をメインとする物産展「北海道物産大会」（4月10～15日）の売上額が、「なつぞら」効果で過去最高を記録した。ドラマ放送で関心を持った来店客が多く詰め掛け、2億6000万円を売り上げたという。

JR北海道は「なつぞら」のステッカーを貼った特急「スーパーとかち」の運行を開始し、日本郵便北海道支社は「なつぞら」の放送を記念し、オリジナルフレーム切手を道内の郵便局で販売、日本航空（JAL）は、なつぞらをイメージした特別塗装機を就航させた。

ロケ地・新得町のJR新得駅内など十勝各地の売店に「なつぞらコーナー」がお目見えし、広瀬すずさんら出演者直筆のサイン色紙のコピーを展示し、関連の菓子商品などを販売している。

（北海道新得町 佐野 周二）

千葉さんと田原さんの勘違い

―搾取と被搾取の中に生きていることを忘れてはいけない―

東京の田原博さんは「第24回全国大会の感想Ⅱ普遍主義は中期政策に示されている」として次のように書いている。(新社会党組織レポート4月号、以下囲みは田原)

中期政策の「(1)社会保障の充実」の項(60頁)は、冒頭で、生存権を保障し、国の責務を定めた憲法25条を「真に実現していきます」と謳っています。いうまでもなく、憲法25条をはじめ幸福追求を謳った13条等の主語は、「すべて国民は」と明記されており、こうした憲法から導かれる社会保障制度の基本原則は、階級闘争の原則からするとおかしいと思うかも知れませんが、貧乏人にも金持ちにも一律に、「一人ひとり」は給付を受ける権利において平等(前出の大会集約)ということになります。

まず田原さんの理解はあまりにも形式論理的であり、社会主義者の認識ではない。

「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」(第25条1項)とする場合、独占資本を頂点とする資本家階級(搾取階級)は、すでに十分に最低限度以上の生活を営んでおり、彼らにあらためてそのような権利を認めて、「国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障…の向上及び増進に努めなければならない。」(同2項)などとする必要はない。必要なのは、もっぱら労働者や農民や小経営者やそれらの引退者や失業者や非正規などの半失業者や身障者等々である。

『私たちの中期的な政策』の「誰もが安心して暮らせる社会の実現」(『21世紀宣言』60頁)の「誰もが」も同様である。

田原さんは、「社会保障制度の基本原則は、貧乏人にも金持ちにも一律に、『一人ひとり』は給付を受ける権利において平等』ということになります」とする。なんと没階級的でお人好しな人か！ 労資協調路線の連合もさぞ驚くことだろう。

さて、中期政策の「(1)社会保障の充実」の具体的な政策は憲法25条を基に「②医療制度の改革」では、「誰もが安心して医療を受けられる権利を確立し」「医療費は基本的に公費でまかなう」としています。つづく、「③年金制度の改革」では、「受給資格を居住期間によるものと改めます」。「④介護制度の改革」では、「介護費用は基本的に公費でまかなうよう改革します」等と明記されており、「普遍主義」との言葉は使っていないものの内容的には普遍主義的な社会保障政策が明示されています。

我々の中期政策の『社会保障の充実』とは、資本家まで含めた「普遍主義的な社会保障政策」ではない。労働者等の民衆を犠牲にして肥え太る独占資本と対決しそれを

孤立させ、資本家階級の政治にかえて民衆のための政治を実現する政策である。

そして、中期政策の「(2)税制の改革」(61頁)では、「応能負担、所得再配分の原則」等が明記されています。つまり、我が党をはじめ共産党や社民党、日弁連などが追求している普遍主義的な社会保障制度は、「税制度における応能負担の原則とセットの関係で、富める者は負担を応能に負担することにより社会の構成員として憲法が保障する生きるための保障給付は平等に受けること」(前出の大会集約)になっているのです。

すでに見たように、少なくとも我が党の社会保障政策は田原さんの言うような普遍主義的なものではない。「税制度における応能負担の原則」は誰もが掲げる。しかしこれだけで貧困や格差が解消できるわけではない。年収10億円の独占的大資本家に90%の課税ができたところで、1億円が手元に残る。年収1億円の資本家にたとえ80%の課税をしても2千万円が残る。我々貧困者とは格段の違いである。これらすべては労働者階級から搾取された剰余価値である。この上になぜ「普遍主義的」に例えば年間120万円のBI(田原さんお好みの)を給付すべきだというのか。少しは縮まるかに見えた格差もまたそれだけ拡大し、搾取される剰余価値を増やすことにならないか。盗人(ぬすつと)に追い銭とはこのことである。

田原さんは党大会で、2011年10月に開かれた日弁連主催の人権擁護大会基調報告の一部を援用して「普遍主義」を強調したが、本レポート末尾に収録された2013年の日弁連決議で、「普遍主義」は一か所に使われているものの、田原さんの使う意味とは明らかに違い、支給要件の緩和などの意である。ここで繰り返し強調されているのは「不平等社会の克服」であって、大資本家にも社会保障を！ などという、資本家も驚くような「普遍主義」ではないからである。

組織レポート4月号には続いて千葉雄也総務局長が「4、5号議案の論点の整理」を書いている。以下の囲みは千葉さんの書いた部分である。

要するに田原さんと基本的に同じことに枝葉を飾っているだけである。

現在の局面をどのようにとらえるのか

21世紀宣言・中期政策は、2002年7月の第7回定期大会で決定されました。高度経済成長終焉≡国家独占資本主義の破綻に対応し、戦後体制の再編の戦略づくりの試みが始まったのは80年代です。世界の先進資本主義が基調とした新自由主義政策は日本ではジグザグ進行であったことは承知のとおりです。

当初、財界の中にも経営戦略・労働政策をめぐる論争がありました。しかし、何より土建国家(公共事業)で戦後日本の政治を支配してきた自民党こそが新自由主義的政策への最大の抵抗体であったことがこのジグザグの主たる要因でした。

新自由主義政策の本格化は2001年4月の小泉首相の誕生です。小泉は、「聖域なき構造改革」を打ちだし、「自民党をぶっ壊す」と叫び、長引く不況の閉塞感打破の期待を背景に戦後保守支配構造に切り込んだことは記憶に新しいと思います。新社会党の「21世紀宣言」「中期政策」は新自由主義が本格化する、まさにその時に作成されました。

新自由主義政策が本格的に始まってから18年、日本社会は大きく変容しました。

この変容に対抗する政策(主体的実践)を考えていくのが、今回の中期政策の補強の議論の眼目であったと思います。(中略)

その結果、日本の雇用慣行を前提にした社会保障制度は機能不全に陥り、正規労働者を前提とする労働運動も大きく影響力を後退させました。そして今、「情勢は根本的に変わろうとしています。資本は『ソサエティ5.0』『第4次産業革命』と言いつつ、『働き方改革』と称して長時間労働を容認し残業手当は払わずに全労働者を使い倒そうとしている」のが、現在の情勢とされています。(中略)

「高度経済成長終焉」国家独占資本主義の破綻などという認識から間違っている。新自由主義が国家独占資本主義にとってかわったなどするのも間違いである。経済成長が高くなったり低くなったりしても、バブルが膨らんでもはじけても、新自由主義がはびころうが新ケインズ主義が幅を利かそうが、国家独占資本主義でなくなるわけではない。「土建国家」は古いケインズ主義だが、新自由主義の方が進歩的だとも言いたいのであろうか。

国際的、国内的諸条件の変化するなかで、剥き出しの資本主義が新自由主義として猖獗(しょうけつ)を極めていく。独占資本のグローバル化が進行している。

東北大震災や原発からの住民を優先した復興よりも、オリンピックを誘致・優先した土木工事が進められている。新幹線と本線と二本の高速道路などがあるのに、10兆円も浪費してアルプスをくりぬき、高レベル電磁波で多くの健康を奪い、電力を浪費しようとしている。原発の建て替えや新增設まで計画している。新自由主義は悪く、ケインズ主義なら良いなどというものではない。いずれも国家が前面に出て独占資本の利潤のために民衆を犠牲にする国家独占資本主義の政策である。

小泉君は「戦後保守支配構造に切り込んだ」のではない。小選挙区制の導入で余裕を持った自民党内で、政策の違いや派閥を巡って、国民の気を引くために芝居を打つてみせ、経世会(現竹下派)支配を壊したにすぎない。総資本の政治的代理人による「保守支配構造」が、「切り込まれて」大きく変わったわけではない。

保守支配構造によって独占資本の為に「日本的雇用慣行」も改悪され、「社会保障制度は機能不全」と言われるほどに劣化してきている。これに対抗して我々は雇用・労働条件や税制や年金や介護等々で民衆の立場からの政策を打ち出している。

新自由主義や新保守主義は1980年代に始まっているが、労働条件は改悪され、実質賃金は1979年以来下がり続き、労働強化は進み、不払残業は増え、非正規な様々な形をとった半失業者や実質的失業者が急増している。「そして今、情勢は根

本的に変わろうとしています」などといっても、新自由主義が何か新しい主義（新しい社会？）に変わろうとしているのだろうか。

なぜ、所得制限によらない普遍主義的社会保障か

加藤副委員長は、「所得で線引きする社会保障制度は労働者階級を分断する」と指摘しました。自民党や資本は、社会保障の企業負担増大を阻止する断固たる決意で臨んでいます。その具体化が「自立自助」を原則に、それができない一部の例外者を選別して給付するという選別主義的社会保障を原則です（ママ）。したがって、多くは所得によって線引きをし、その線をできるだけ低くしようとしています。利潤の最大化を求める資本の論理です。

線引きは、その線上で懸命に、且つ慎ましく働き生活している人々にとっては生活の根底を規定します。なぜなら「恩恵」は適用者に、適用外の者は負担を強いられるだけです。そうであれば「権利としての社会保障」をと、「朝日訴訟」以来半世紀にわたり進歩派の人びとは訴えてきましたが、線引きがある以上、「猜疑心」と「恥辱感」は拭い払うことはできないと思います。生活保護バッシングと生活保護の捕捉率20%という現状がそれを裏付けています。

もちろんすべての制度を直ちに普遍主義的の制度にできるわけではありません。社会保障制度の原則を確認することです。自民党政権が場当たり的な、そして最小化を狙う社会保障制度に解体に対し、誰もが、最低生活保障をうける権利があり、誰でも、社会の構成員なら対象になるということです。この普遍主義的の原則を労働者・勤労者大衆とともに確認し、誰もがその利益の享受者（福利）になる制度に向かつていくことが必要です。（中略）

「労働者階級を分断する」ような「所得で線引きをする」のではなく、独占資本を頂点とする資本家階級1%と、99%の民衆との間に線引きをするように改めるべきである。

保育、教育、医療、介護、住宅などの現物給付の分野で、「99%」の側の中の必要とする人たちが低廉な料金で（あるいは無償で）受けられるようにする、最低賃金を大幅に引き上げるなど、多角的な闘いを通してこれに近づけるべきだと考える。搾取階級と被搾取階級との関係を明確にし、独占資本を頂点とする搾取階級を孤立化させ被搾取階級の生活を守り向上させ、格差を是正するためにも。

加藤さんや千葉さんは、原則的に所得制限を撤廃して、資本家階級＝富裕階級にも社会保障を適用すべし、「一人ひとりには給付を受ける権利において平等である」「所得制限のない普遍主義」としてB Iを導入すべし、と考えている。

千葉さんも田原さんと同様に、「誰もが」の中に、資本家階級も含めてしまう。

「研究課題としての『ベーシックインカム』」

（前略）B Iは普遍的社会保障政策であることはいまでもありませんが、普遍的社会保障理念を基本とすること、普遍的社会保障の一環であるからと言ってB Iを新社会党の「具体的政策」として掲げることとは別の問題です。「B Iは研究課題」です。

千葉さんはこんなわけの分からないことを言って、煙に巻いている。

おわりにー 私事、独り言です。

(前略) 『純粹』社会主義の真理を繰り返すだけでは、なんの役にもたない」との先人の言葉を思い出します。現在の局面、改憲阻止のための山場で、憲法を生かす統一戦線の具体化が課題となっています。社会主義者の任務は、この前進に全力を尽くすことであることは有(ママ)までもありません。一般的・抽象的な議論は、すれ違いの論争に陥る危険があると思います。

『純粹』社会主義の真理をくりかえすだけでは」とは何を言っているのか、とんと意味不明である。

「一般的・抽象的な議論」だけで良しとする人がどこにいるのだろう。原則的・抽象的な議論も、具体的な議論もともに必要である。

あるいは自治体労働者として千葉さんが、搾取・被搾取の関係を理解し難いのかも。本誌1252号(2017年11月15日号)の拙稿「向坂先生の『自治体労働者に寄す』を読もうー自治体労働者が混乱から脱出するためにー」を是非一読されたい。

組織レポートの最後には日弁連の次の決議が収録されている。(傍線は原)

貧困と格差が拡大する不平等社会の克服を目指す決議

2013年(平成25年) 10月4日 日本弁護士連合会

現在、我が国では、貧困と格差の拡大・所得の二極化が進行し続けている。労働者の賃金は1997年をピークに減少傾向にあり、全雇用労働者のうちに占める非正規労働者の割合も38%を超えるなど、不安定・低賃金労働が蔓延している。また、生活保護利用者は増加し続け、経済・生活問題を理由とする自殺は依然として年間5000人を超え、餓死・孤独死の報道も後を絶たない。このように拡大する貧困問題に対しては、税と社会保障による所得再分配機能の重要性が高まる。しかしながら、社会保障制度改革は、社会保障費を抑制する方向で行われており、国民の生活や老後に対する不安は高まっている。憲法が保障する生存権や法の下の平等の観点から見て、貧困と格差が拡大する中において、社会保障費を削減し所得再分配機能を弱めて生存権保障を脅かす「不平等社会」の克服は、喫緊の課題である。

- ・ したがって、社会保障については、その権利性を明確にするとともに、不平等の克服が公的責任であることを明確にし、
- ・ によって、当連合会は、国に対して、この「不平等社会」を克服するために以下の施策を求め、

1 社会保障制度改革においては、公的責任を軽視した社会保障制度改革推進法を抜本的に見直すとともに、社会保障の権利性を明確にし、社会保険中心主義から転換した税財源による普遍主義に基づく医療・年金・介護や、家賃補助などの住宅保障を内容とする社会保障基本法を早急に制定すること。

「不平等社会」

を克服する取組を積極的に進めていくことを決意する。

以上のとおり決議する。

(2019年5月1日 世界の労働者に連帯して 原野人)

◇ 読者からのおたより ◇

不安 新潟県内では県議選で野党統一候補が善戦したと思います。これから総括です。

ところで、新社会はどこへ行くのか、不安でたまりません。貴誌No.1286(19年4月15日付)の新潟太郎さんと同じ感想を大会に参加して思いました。

新社会『道しるべ』(4月16日付)は、ある地域ユニオンの労働者の意見を「左翼の残念なことは、最後に9条や原発反対に逃げこむこと。投票に行かない5000万人弱には、それだけでは通じない」とのせています。そして『もつと心をつかむ政策』を出すべきである。「ブラックバイトの学生・ブラック企業の労働者の心をつかむには社会保障制度の充実をしなければならない」とのせている。一方、「それではやめればいい」では通じないともあります。

私も地域ユニオンにかかわっていますが、「やめればいい」と思ったこともないし、相談者に答えたこともありませぬ。それこそ、加藤副委員長集約答弁の「選別主義で選別されるのは労働者である」ことを肯定しているのではないか。社会保障制度の充実は今までの労働者階級の闘いの結果であることを忘れているのではないかと考えさせられます。上から与えられた諸権利で労働者意識が生まれるのだろうか。

今日、ある組合事務室を訪問した際、「会計年度職員を組織化するのは、私たちが、ストライキで、その人たちを守る、また、ストライキに立ち上げらせる覚悟がないと難しい。その人たちは5年で首切りをされるのが、一番嫌っているのだから」と私に話した。まったくそのとおりです。

私たちの主体性の確立、強化がなければ、社会保障制度の確立もまたできないと考えます。

一般紙の社説である「道しるべ」にこんな論説をのせる中央本部は、何を考えているのかわからなくなります。やはり、中期政策補強に反対する者には、耳を傾けないのか？ それこそ党内選別主義ではないのか。

(新潟吾郎)

毛利孝雄さんの「辺野古の現場から」No.135 工期短縮を盛んに喧伝する政府・防衛省。

しかし、軟弱地盤も活断層も高さ制限違反も、その事実が消えてなくなるわけではない。

▽6・10防衛省・環境省交渉&土砂搬出反対署名提出&報告集会

*日時 6月10日(月) 通行証は ①14時45分〜 ②17時〜 1Fロビーで配布します。

(15時15分〜17時 防衛省・環境省交渉、17時30分〜18時 請願署名提出、18時〜19時30分 報告集会) *資料代なし(カンパお願い)

*場所 衆議院第2議員会館・多目的会議室 *呼びかけ 辺野古土砂搬出反対全国連絡協議会／戦争させない・9条壊すな！総がかり行動実行委員会

▽月例・防衛省前申し入れ・抗議行動(呼びかけ 辺野古への基地建設を許さない実行委員会)

・日時 6月3日(月) 18時30分〜19時30分 ・場所 防衛省正門前(市ヶ谷)

▽元号と天皇制、平和憲法を考える集い(主催 壊憲NO! 96条改悪反対連絡会議)

・日時 6月13日(木) 18時30分〜 ・場所 文京区民センター2A(後楽園・春日)

・講演 高嶋伸欣さん(琉球大学) ・資料代 800円